

## リンカーンセンター・ダンスコレクション

市 川 雅

リンカーンセンターのダンスコレクションについて説明します。私は今年の四月から五月のはじめにかけて二週間ばかり、ニューヨークのリンカーンセンターのダンスコレクションに入りになっておりまして、皆さまよりは少しはコレクションについて詳しく知っているのではないかとということで、ここで少し説明させていただきます。何故、一週間もダンスコレクションにいたかという発端から話さなければなりません、実は二年くらい前にニューヨーク州立大学のドーチェスター校に、ジョン・ミューラーという人がおりまして、この人は舞踊映画をたくさん集めている大学の先生で、「アメリカで日本の舞踊映画を観せないか」という話を私のところへ持ってきたわけです。ところが、なかなか話が進展しないでしたら、今度は、リンカーンセンターでアジアの舞踊の映画のシリーズをやりたいという話になりました。それで日本の映画を上映したらどうかということになりまして、ジュネディーブという有名なキュレーターから手紙がありまして行ったわけです。ニューヨーク州立大学のドーチェスター校のジョン・ミューラー氏は『ダンスヒーロー物語』というタイトルの本を出しておりまして、これを見ますとモダンダンスやバレエ、それから民俗舞踊、そういう映画がどこで手に入れられるか、いくらで借りられるか、そういうことが書いてありまして、非常に便利な本です。これを見て日本から発注して、レジスターメールでお金を送れば、映画を送ってくるという仕掛けになっております。アメリカにはドーチェスター校以外にもインディアナ大学にダンスフィルム部門がありまして、ここは自分のところで製作、販売もしています。それからもう一つ有名なのが、ロサンゼルスのカリフォルニア大学です。ここにはスナイダーという舞踊映画の専門家があります。

私はリンカーンセンターに行くことになりました、持っていったフィルムを申し上げますと、二つのプログラムを持っていきました。つまり、日本のトラディショナルなもの、日本のコンテンポラリーなもの、まずトラディショナルな方から説明しますと、これは有名な映画ですけれども、リンカーンセンターの方では観たことがないので持ってきてくれということでした。これは日本舞踊です。これは郡司先生が監修をなさった幾つかの舞踊が収録された20分くらいの映画です。それ

から神楽、これはNHKの方から借りました。それから地唄舞では武原はんの「雪」という作品を持ってまいりました。どういうわけか、むこうでは、東京には平凡社に事務所がありますECフィルムから仕入れた雅楽などの映画を幾つか持っていました。皆さんも気がつかれたと思うのですが歌舞伎がないのですが、むこうでは歌舞伎舞踊というのが観たいと言うことでした。ところが歌舞伎舞踊というのは持っていきませんでした。なぜかと申しますと、絶対的に本数が少なくて、新しいものはほとんど撮られていない。それで文化庁にもお願いしまして中村歌右衛門の『娘道成寺』を持っていこうと思いましたが、松竹の方で貸出料が20万円ということで、持っていけなくなってしまいました。日本に帰ってきて、いろいろと聞いてみましたところ、歌舞伎舞踊のものは日本歌舞伎協会の方で何本か持っているということがわかったのです。先に知っていればそこから手配して持っていけましたが、持っていきませんでした。それから能がまた、そんなに多くないんです。これは岩波の『日本の舞踊』のような、幾つかの能が収録されたものはあるのですが、一曲全部が収録されているものは無くて、結果的には四～五本のものを持っていくということになったわけです。何故、歌舞伎舞踊が撮られないかと言いますと、これは松竹という存在もありますし、それから肖像権とか版權を主張するわけでした、そうしますと絶対に撮れないわけです。その一方で、民俗芸能のフィルムはものすごく多くて、これは版權を主張しないからです。そのようなわけで、日本の舞踊を映画に収録したり、ビデオに録画したりする場合に、どうしても民俗芸能の方が多くなってしまいうわけです。それからもう一つのプログラムはむこうの人が決めた題名で、「フィルムズ オン ザ モダニズム」と書いてありまして、現代舞踊という意味でしょう。それからアキコ・カンダの「フォーシーズン」。それからもう一つは「馬頭の記録」。それからNHKで撮った武満徹の作品など、そういうものを五本持っていきました。これは現代舞踊協会の理事長にお願いしましたが、皆さん映画を全然持っていない。つまり、映画を撮っていないということです。ビデオは皆さん持っています。ですから現代舞踊協会の人達というのは、映画を撮って、それを売るとか儲けようというようなことは全然考えていないわけです。

あくまでも自分にとっての記録として保存しておくという、自分のためだけに記録として撮っているわけです。これはバレエ協会も同じで、日本のバレエのものというのは映画が全然無いです。それから新舞踊関係もほとんど無いです。皆さんビデオを持っているので、これを映画にすることはできますが、お金がちょっとかかりすぎるわけです。カラービデオを映画に映し直すと、だいたい一分間に一万円くらいかかるわけです。ですからこれが60分ですとかなりの金額になりまして、それだけのお金が無いということになります。これとは逆にリンカーンセンターの場合は、映画をビデオにして、個人に観せるというシステムをとっているわけです。ですからスクリーンで観せるのはほとんどなく、映画の編集用機械を使いまして、一般に観せているわけです。

そういうことで日本の舞踊の映画を持っていきまして、上映する際にちょっと解説をしなくてはいけないということで、20分くらい英語で解説をしたわけです。私はこういうところに立って英語で喋るといことはとても出来ませんから、原稿を書きまして、それを讀んだわけです。その内容は、とくに日本の古典芸能に関しては、わりと知っているわけです。例えば、リンカーンセンターでご一緒しましたジョイス・マーン先生ですとか、早稲田小劇場をブルックリンカレッジで上演したベニット・オルットラン先生。この人は、‘能の舞踊形式の発生と意味’というものを研究された方です。そういう学者の方々がおりまして、わりと日本の芸能に対して興味があって、理解があるようです。というのも現代舞踊に関しては、ほとんどむこうにいていなくて、日本の現代舞踊を集中的に外国に紹介したというようなことはほとんど無いわけです。ですからどういふものをするのかということを知らないわけです。少しでもインフォメーションを与えるのが私の役割ですから、例えば、日本の現代舞踊というものがいつ頃から出てきたのか、伝統とどのように交錯しているのか、それからヨーロッパのどのようなものから、あるいはアメリカのどのようなものから影響を受けたのか、それから今、どのような傾向の日本の現代舞踊があるのか、それを例えば、暗黒舞踏であるとか、モダンダンスであるとか、モダン・バレエであるとか、新舞踊であるとか、そういうようなことを説明してきたわけです。これは映画の場合、映画の出来不出来というのがありまして、やはり良い映画というのはダンスの素材よりも、より高い威力を発揮するらしいです。映画になったもののなかでは武原はんの「雪」などは、わりと映画的に面白かったです。ですから向こうの皆さんも反応して下さったような感じでした。リンカーンセンターでは二回ありまして、もう一回は

ダウンタウンの方でやりました。リンカーンセンターのお客というのは日本最顶层であつたりしまして、年金生活者の比較的に年齢層が高いという気がしました。ですがもう一方は、若い芸術家がたくさん観に来ていました。そういう観客の違いもありますので両方やらないといけないわけです。私はとにかく踊りの映画をスーツケース一つくらい、全部で約30キロくらい持っていったわけです。ですからスーツケースひとつで舞踊の世界を海外に持っていけるというのは特有です。この便利さ注目しまして、こういう企画をまたまたやろうと思っているわけです。

リンカーンセンターのダンスコレクションの方の話に移ります。今まで話したものは、ジャバントゥディという大きなプログラムがありまして、この一環として行ったわけです。他にも写真展があつたり、それから音楽の‘間’というものの展覧会があつたりしました。ですから私のやったことは、この‘間’の展覧会や写真展に比べると非常にスケールの小さいもので、新聞記事の種などにはならなかったですが、芸術家とか研究家という人達が観に来てくれましたので、成果はあつたのではないかと思います。このリンカーンセンターのライブラリーの本当の名前のダンスコレクションというのは、ニューヨーク・パブリックライブラリーのです。ですからリンカーンセンターにあるニューヨーク・パブリックライブラリー、つまりリンカーンセンターにある公共図書館のダンスコレクション、そのような住所になります。リンカーンセンターができたのが1965年です。その前に既に、公共図書館のなかにダンスコレクションというのはあつたのですが、これはアメリカで最大のものです。このニューヨーク・パブリックライブラリー以外に、ダンスのコレクションを持っている人、ダンスミュージアムを持っているところに行ったわけです。それによりますと、1930年代位に有名なクルトヨースが舞踊を創って賞金をもらったのですが、この賞金を出したところが舞踊編纂所というところでした。そこがミュージアムとしては一番最初なのですが、ここでもついていたものを1951年に、スウェーデンにダンスミュージアムをつくるということで、その一部をオペラ座のミュージアムに寄付したということです。もともと舞踊の世界編纂所というのはスウェーデン人が設立したものですから、1951年にダンスミュージアムを設立した時に、1933年のバレエの関係のものを全て持っていきました。それとインドネシアの民俗舞踊のフィルムが、全部で21あるということですが、これは第二次世界大戦前のものです。これを持っているということは、ヨーロッパではよく知られています。今、そのスウェーデンのミュージアムでは、このインドネシアのフィ

ルム以外に、クルトヨースのフィルム、それからディアギレフのもの、そういうものを持っているそうです。それ以外も、リュロアーセラなどというのもフランスにありまして、ここも17~18世紀の宮廷バレエに関する資料をたくさん持っています。その他には例えば、イギリスのヴィクトリア・アルバート・ミュージアムがありまして、ここにはディアギレフ関係がたくさん集まっています。リンカーンセンターの場合もダンスコレクションのような、現代生きているダンサーの名前のコレクション、あるいは亡くなったダンサーの名前のコレクションもあります。例えば、ロビンスが今、どのようにしてリンカーンセンターのダンスコレクションに協力しているかと申しますと、彼は『ウエストサイド物語』以来、ミュージカルでたいへんに儲けているわけです。ロンドンでも、パリでも、ニューヨークでも、彼が踊れば一晩にお金がたくさん入ってくるわけです。彼はそのお金をやはり舞踊界のために使いたいということで、フィルムを集めるということにはロビンスがお金を出しているわけです。このことは彼にとっても大変名誉なことです。それ以外には大学の図書館のなかにダンスコレクションを持っているところもたくさんありまして、例えば、ドイツのゲッチンゲン大学などです。それから有名なケルンが雑誌を出しているフルト・パーカー氏のコレクションもあります。ここも私は一度、ケルンのそのコレクションに行きましたけれども、ここは本が多いです。

リンカーンセンターのダンスコレクションにはどういうものがあるかというお話をいたします。やはり本が一番です。と言いましても、マテリアルの数でいうと96パーセントが他のもので、4パーセントくらいしか本がないわけです。ただ、これは点数でいうと、本は今、3万冊、写真が20万枚、それからプログラムが5万部です。それから、写真がこの世のなかに出現する以前のものとして、プリントの絵画あるいは版画ですが、そういうものが6千点あります。西洋バレエのもの、宮廷バレエのもの、ほとんどロマンチックバレエなどは19世紀のなか頃の話で写真が無いわけですから、これらの資料はプリントとなって残っているわけです。それからいろいろな人が書いた原稿、その他が6万あります。こういうものをどんどん集めています。これには11巻までのカタログがありまして、日本にはお茶の水女子大学にあります。これをひくわけです。そうしますと、例えばアンナ・パブロワとひきますと、そこにアンナ・パブロワについてどういう本があるか、そしてアンナ・パブロワが実際に書いた手紙にはどういうものがあるのか、そして雑誌その他ではどういう雑誌にアンナ・パブロワがのっているか、それか

ら写真にはどういうものがあるのか、映画にはどういうものがあるのか、それからアンナ・パブロワが実際にはいた薄汚れたトッシューズ、そのようにアンナ・パブロワだけでも、いろいろなものがあるわけです。それからイサドラ・ダンカンの持ち歩いたスーツケースなど、変わったものがあるわけです。ですから96パーセントが本以外であるという意味もわかるわけです。それから写真も、イサドラ・ダンカンが生まれて育ったところの写真などもありました。ですから、その収録カタログに書いてあるものはダンスコレクションで全て持っているわけです。従って、アンナ・パブロワについて知りたければ、これをひけばすぐにわかるようになっていくわけです。まあ、私は特別にアンナ・パブロワのことを調べようとしているわけではありませんが、映画だけは観ようと思ひまして調べましたら、アンナ・パブロワの映画だけで5本から6本ありました。イサドラ・ダンカンの映画も1本ありました。ところがこれがもの凄くコマ数で、チャップリンの映画みたいにチャカチャカした動きの映画なのです。ですからイサドラ・ダンカンの映画でも、それが本当にイサドラ・ダンカンなのかどうか確認出来ませんが、それでもイサドラ・ダンカンであると言っているわけです。そのようなわけで、狭くて小さいテレビで2時間ぐらい観ていると本当に疲れます。ですから1日に2時間から3時間がせいぜいです。そうすると毎日、一人のものを観に行くわけですが、私はドイツのものも興味がありますので観ようと思ひましたら、マリー・ヴィグマンのものもかなり残っていました。それから現代のものも随分ありまして、この現代のものはだいたいビデオに収録されたものとなっています。ただ、大抵の最近のものには全てパーミッション・ピッグワイヤーというハンコウが押されてあります。ということは、例えば、グラハムのフィルムがあるとしたら、グラハムに断ってくれということ。これは結局、皆がビデオをたくさん観てしまうと、現在のグラハムの公演に客が入らなくなってしまうことを心配しているわけです。ですから、どのような目的でビデオや映画を観るのか、それが例えば研究の目的なのかどうかをグラハムに聞くわけです。そういうことで許可がいるわけです。私はグラハムのは観ていないのですが、ローラ・ディーンという、最近の現代舞踊家がスピンドリングダンスというのをやったので、そのビデオを観ようと思ひまして、ライブラリーの女性が電話をしてくれましたら、ビデオを観てはいけないうわけ。そのかわりに稽古を見に来てくれということ。稽古を見に行ったわけ。で、そのようなシステムになっています。それから写真の場合も、これも写真の版権の都合がありまして、お金を払

います。なかには何点か無料のものもありまして、それを使わせてもらったわけです。それから面白いものでは、人の声を収集したものもありました。これは現在、生きている舞踊家を誰かと対談させて録音したテープですが、これがたくさんあります。これは、そのうちに本にするのかどうか、どのような目的で録音して録ってあるのかは分かりませんが、舞踊家の自分の経緯というか、自分がどのように舞踊をやってきたのかというような話で、内容は雑多ですけれども、そういう舞踊家の声を収集しているということがあります。これは着想が良いというか、ちょっと意外な感じがしました。

それから備えてある機械のことを申しますと、例えば音量の機械ですと、今、申しましたような人の声を収集するためであるとか、そういう録音をする機械もありますし、ビデオも3台あります。それから映画の機械が2台あります。ですから先ほど申しましたお茶の水女子大学にあります11巻の目録を見て、むこうに手紙を出すとすぐに返事を送ってくるわけで、実に便利にできています。それから写真を切ったり貼り付けたりということをする作業台というものもありまして、そういうところで作業しているキュレーターとい申しますか、事務員がいます。この人達が実にてきぱきとしていまして、この人達は勉強をしているわけではないので学芸員とは言わないですが、10人くらいの人数でやっています。ダンスコレクションは本とか、色々なものを収集しているだけではなくて、時々エキジビション、展覧会を催します。これはご覧になった方もいらっしゃると思いますが、展示場がありまして、そこで例えば、文化センターであるとか、メトロポリタンオペラ劇場であるとか、そういうところでデンマークバレエを公演するという時には、これを企画して展覧会をするというようなことをやっています。

\*この原稿は記録テープを起こし、御校閲を賜りました。

\*1979年度秋季第8回舞踊学会